第9号

がん 連携パスだより

発行：H23/4/25

三河のつぶやき

がん地域連携室　室長
三河　貴裕

亀田総合病院内でアンケートをとっています。「当室の活動は役に立っているのか？」まだ全部は帰ってきていませんが、少しずつ院内職員が地域のことを意識して下さっているように感じます。「丸山」「笹」「西崎」「国吉」みなさんどのあたりかわかりますか？？

地域住民あっての、地域を支える医療機関あっての亀田総合病院だということを忘れないようにしましょう。同時に当院のこの地域で果たす役割は大変大きいことも忘れないようにしましょう。

地域連携の中での薬剤師の役割

亀田総合病院　薬剤部　安室　修

地域連携の目的は医療機関のスタッフ同士が協力し、患者さまに切れ目のない医療を提供することだと思います。地域連携クリニカルパスはそのツールとして利用してきました。ひとくちに地域連携といっても、内容については地域や対象疾患でそれぞれ異なると思います。我々薬剤師が医療チームの中で果たすべき役割は、薬剤の適正使用により患者さまに安心・安全な医療を提供することだと感じています。患者さま1人が患っている疾病は必ずしもひとつとは限らず、複数の疾病があるケースも少なくありません。主疾患のみならず、合併症のコントロールが治療全体の効果に大きく影響する場合もあります。

鴨川は地域の特性として患者さまの多くが高齢者であり、薬剤の理解度について不十分なことがあります。薬剤の名称、用法用量、外用剤や吸入薬などではそれらの正しい使用方法など、我々薬剤師が患者さまに伝え、正しく理解していただくことは大変重要であり内容としても多く、それらは1度口頭で説明したのみでは十分に伝達できないことがほとんどです。また、誤った使用は生理機能の低下した高齢者では正しく使用することがとても大切です。

医師が正しい診断・処方をし、看護師が適切なケアを行っても、患者が正しく薬剤を使用できなければ医療チームとしての目的は達成されません。薬剤師は患者さまに適切な説明を行い、処方薬が適正に使用されているか継続して評価する必要があります。患者さまの状態は時間ともに変化します。その変化により、処方薬が正しく使用できなくなる場合もあります。

地域全体で患者さまのケアをするとき、地域の薬剤師、医療機関との連携が大きな役割を担っているのではないでしょうか。

がん地域連携室スタッフより ご挨拶

腫瘍内科　尾崎　由記範

この4月からがん地域連携室の一員として参加させて頂き、地域連携事業に関わらせて頂くこととなりました。このような運びとなった経緯は、がん地域連携室・室長であり直接の上司であります三河先生に無理矢理引き込まれたわけでは決してなく、後期研修1年間を通して地域連携の重要性を実感したからです。日常の診療の中で、地域の先生方への紹介はタイミングがとても重要であり、そのためには地域の先生方との風通しがよくなくてはならないと感じましたし、またそれはそのまま患者様やそのご家族の利益につながると考えています。まだ地域連携のことを気にかけられるような実力や知識はありませんが、地域連携事業の一助となれますよう努力致しますので、今後ともよろしくお願い致します。

つながり（東日本大震災に想う）

松永醫院　松永　平太院長

東日本大震災のボランティアとして、2週連続、週末を利用して宮城県石巻へ支援してきました。石巻市の災害状況はマスコミの映像の通りですが、テレビでは伝えられないことは臭いと埃のひどさです。街全体からドロ臭さと魚の腐ったようなにおいが漂い、埃が気管支と目を襲ってきます。市民はマスクを常時付けていますが、健康なのに何故か慢性の咳が続いて苦しいと訴えている方がいます。私自身も、たった2日間の滞在でしたが、10年以上ぶりに喘息発作を起こしました。目も充血して、痛くなります。しかも、地元市民の方達は避難所生活をしており、劣悪な環境の下で未来を予測することもできずに過ごされています。

「人形のように人が流れて行った。」、「昨日までいた家族がいなくなった。」と涙も流さずに語る人に、心のケアの必要性を感じます。地元の人間ぬきのボランティア活動をしている感がありました。今を守るだけで精一杯だった地元の人間も、次第に周りを見渡せるようになっています。これからは、地元の人間が中心となり、ボランティアと連動しながら、未来を創る時期が来たと思います。

医療環境も、病院での救急医療から慢性疾患の管理へシフトしています。また、要介護者が重症化しないよう在宅医療の提供が大切にもなっています。亀田の小野沢先生が中心となり、在宅環境を調べるために被災地ローラー作戦を展開しました。また、困っていても気付かない、気付いていても我慢する市民に対して、花の谷の伊藤真美先生が中心となり青空市で南房総の新鮮な野菜、果物を届けました。

ローラー作戦でも、青空市プロジェクトでも安房地域の仲間が中心となり、全国の市民が集まり被災者支援を行いました。仲間は歯科医師、看護師、介護士、ケアマネージャー、MSW、学生、主婦、子供、一般の市民など様々でした。一人の思いから始まり、その思いに共鳴して多職種が集まり、連動しながらプロジェクトが遂行できたことは素晴らしいことです。思いを実行することはそう簡単にできることではないと思いますが、日頃から連携を図ることで顔が見えて、温もりが伝わり、広がることができたのでしょう。人と人とのつながりの大切さを感じ、何もないことに感謝し、ただただ生きているだけで有難いことを気付かされました。そして、やっぱり、安房は日本一いのちが安心、安全な地域だと誇りに思いました。

亀田総合病院がん拠点病院推進センター
発行責任者：亀田　信介
編集責任者：唐鎌　房子
TEL：　04-7099-1230〔内戦3248〕